

ライフキャリアとサードプレイス

『日本労働研究雑誌』編集委員会

多くの人々は生活する中で、家庭（第1の場）でも職場（第2の場）でもない居場所を有していると思われる。本特集が対象とするのは、様々な役割を果たしているとして注目されている第三の居場所、すなわちサードプレイスである。サードプレイスとは1980年代にアメリカで提唱された概念であり、現在では街のパブからNPO団体まで、人の集まる様々な場所がサードプレイスと見なされている。初期のサードプレイスは、パブやコーヒーショップなどの小規模な自営業が対象とされていた。そして、そこに集まった人々が、お喋りなどを通じて繋がる場所として位置づけられていた。その後、NPOなど、共通の目的を持った参加者が集まり、地域福祉の向上、新たな事業創出、個人のキャリア支援を実施するような団体もサードプレイスとして見なされるようになってきている。サードプレイスとして見なされる組織が拡大するとともに、地域の憩いの場にとどまらず、参加者に対して特定の支援を行うような場所としても位置づけられるようになってきていると言えよう。しかしながら、国、地方自治体、企業といった組織に比べると組織の存続基盤が脆弱なサードプレイスでは、安定したサービス供給体制の構築という点で心許ない部分もあると思われる。また、どのような場所や団体であればサードプレイスと見なされるのか。この点についても不明瞭な部分がある。

そこで、本特集では、最初にサードプレイスの概念の整理（石山論文）を行った上で、人々のライフキャリアにかかわる事柄、具体的には職業紹介（中西論文）、就業者の能力開発（長岡・橋本論文）、離職者支援（片岡論文）、リタイア後の生活（坂倉紹介）に対して、サードプレイスが実施している支援活動を取り上げ、サードプレイスを通じて提供されるサービスが持つ可能性と課題について検討した。

本特集が最初に行うのは、サードプレイスの概念についての整理である。街のパブからNPO団体まで人

の集まる様々な場所がサードプレイスと見なされていることから分かる通り、その形は多岐にわたる。そもそもサードプレイスとは何なのか。石山論文はこの点について、サードプレイスの概念の拡張過程を踏まえながら整理している。石山氏は、サードプレイスを「テーマ性と地域性」「個人のプライバシーと集団での交流」の二軸に基づいて整理している。そして、地域性を軸に人々が結びついているサードプレイスを「伝統的サードプレイス」、地域ではなくテーマを軸に人々が結びついているサードプレイスを「テーマ型サードプレイス」としている。その上で日本の特徴として、両者の特徴を併せ持つことを指摘し、そうしたサードプレイスを「拡張されたサードプレイス」と位置づけている。石山氏は、「拡張されたサードプレイス」には、参加者の自主性を尊重し、試行錯誤できる環境を用意することに加えて、組織を存続させるための安定的な収益基盤の確保も求められているという。そのためには展開する事業の多角化が必要なことを指摘する。

サードプレイスは、就職やリタイア後の地域での生活といった人々のライフキャリアに対して、どのような支援を実施してきたのか。石山論文が「拡張されたサードプレイス」と位置づけた地域性とテーマ性の双方を持つ職場でも家庭でもない第三の居場所の一つに、同郷者集団がある。この日本において古くから存在する第三の居場所である同郷者集団が持つ職業紹介機能について論じたのが中西論文である。中西論文では、同郷者集団は、同郷者間の親睦を深めるという目的を維持しながら、同郷者集団が持つネットワークを活用し、同郷者に生活の場や就職先を斡旋、紹介する機能を有していたこと、そして、その機能は、公的な職業安定行政や社会保障制度を補完するものであったことが指摘されている。特に、職業紹介制度が未整備であった戦前においては、地方出郷者が都市部での職場や最初の生活の場を獲得する上で、最も身近で信頼

に足るものとして同郷者集団が活用されていたという。しかし、1970年代以降、公的な職業安定行政の整備や学校を通じた就職への経路が確立されていくなかで、その機能は徐々に失われ、文化・心理的機能に特化した活動が顕著になってきており、近年は社会変動のなかで同郷者ネットワークが担う職業紹介機能が極めて弱まっていることを指摘する。中西論文は、サードプレイスは、永続的にサービスを提供することができるような組織ではないものの、そこへの参加者に対して必要な支援を必要な期間に渡って行い続けることが不可能な存在ではないことを示していると言えよう。

次に取り上げる長岡・橋本論文では、NPOにおける越境学習の特徴に着目し、学習空間としてのサードプレイスについて論じている。長岡・橋本両氏は、同じNPOでの活動であっても、所属組織の介入が強い「職場に近い場での越境学習」とそうではない「サードプレイス的な場での越境学習」があり、両者では学習内容に違いがあることを指摘している。前者の場合、所属組織の業務に役立つ学習成果が見出せる一方で、後者の場合、所属組織の業務に直接関連するわけではないが、個人のキャリアに役立つ学習成果が見出せるという。長岡・橋本論文は、サードプレイスにおける越境学習には、一つの組織にとどまらない企業横断的な職業キャリアを歩む上で役立つような学習成果がある可能性を示唆するものと言えよう。

ライフキャリアの中で、一旦労働市場から退出することも当然ながらあるだろう。そのような人々の支援について論じたのが片岡論文である。片岡氏は事例調査に基づき、サードプレイスが職業訓練やリカレント教育で指摘されていた問題（学びや支援の継続性、再就業への接続、受講者の限定性）を補完する機能を有していることを指摘する。サードプレイスの持つ固有の特徴として、参入時の間口の広さ、参加者同士の交流、活動を通じたスキルの向上や自己効力感の高まりを挙げ、これらは、一旦離職した女性が、再び仕事を得ることに寄与していることを指摘する。片岡論文からは、参加者が自身の持つ専門性を活かすことができる場として機能した場合、サードプレイスには、就業の準備から就業までの橋渡しの役割を果たす機関として期待できることが示唆される。一方、片岡氏は、離

職者支援という機能を維持することができている要因として、参加者の同質性（例えば子どもの年齢や出身地）、小都市であること、メンバーの継続的なスキルの向上などを挙げている。この点から、一定の条件を満たした際に、離職者支援サービスの継続的な提供が可能になることが示唆される。参加者や立地条件など、特定の環境が整わなければ、サードプレイスは、支援を行う組織としては脆弱な存在であるとも言えよう。

最後の坂倉紹介は、企業からのリタイア後のセカンドキャリアとサードプレイスについて論じている。会社生活で構築してきた人間関係や価値観を一度リセットし、新たな人間関係や価値観を構築する場としてのサードプレイスの役割について、「芝の家」や「ご近所イノベータ養成講座」で実施されている取り組みが紹介されている。坂倉氏によると、定年前のリタイア間近の人々やリタイア直後の人々が、自分自身の価値観を再認識したり、新たな価値観を見つける上で、時間に制約されることなく、多様な年代の人々との交流を図ることができるというサードプレイスの持つ特徴が寄与しているという。坂倉紹介では、サードプレイスの交流が、これまで所属していた組織で培われた人間関係や価値観を一度解体し、再構築することを促していることが指摘されている。こうした解体と再構築という機能は、サードプレイスの持つ一つの重要な機能なのかもしれない。

本特集の論稿から、国、地方自治体、企業などに比べると組織体として脆弱なサードプレイスを通じて提供される支援が、人々の就職や離職後の生活の充実などに寄与していることが示唆された。と同時に、そのためにはいくつかの条件があることも示された。事実上、支援を終了しているような事例もあった。このように、支援の継続性において課題を抱えている部分はある。本号がライフキャリアにかかわる支援活動を考える上で、公でも私でもない団体の可能性について改めて考えるきっかけとなり、政労使以外の団体も含めた公助、共助、互助、自助の在り方に関する議論の活性化に繋がれば幸いである。

責任編集 西村純・山下充・池田心豪
（解題執筆 西村純）